

氏名	岡崎 眸 OKAZAKI Hitomi
所属 職名	人間文化創成科学研究科文化科学系 教授
学位	P h . D (1986年 ミシガン大学)
専門分野	日本語教育学
URL	
E-mail	okazaki.hiromi@ocha.ac.jp

研究者キーワード / Keywords

共生日本語教育
年少者日本語教育
日本語教員養成

Education for symbiotic Japanese
Educaon for Language minority children
JSL teachere developement

主要業績

岡崎眸「子どもの実質的な授業参加」を実現する年少者日本語教育?二つのアプローチによる検討?」社会言語科学 第13巻第1号 pp.19-34

唐澤麻里・野々口ちとせ・陳メイケン・孫愛維・河崎俊子・岡崎眸「在台湾日系企業の社内コミュニケーションに対する駐在員の認識」お茶の水女子大学人文科学研究 第7巻 125-38

「多文化共生社会におけるビジネス共生日本語教育の構築と教員養成に関する研究」平成19-22年度 科学研究費補助金研究基盤研究 B(2)課題番号19320075 成果報告書 研究代表者岡崎眸

研究内容 / Research Pursuits

主に二つの研究課題で研究を行った。(1)多言語・多文化共生社会を切り開くビジネス日本語教育と教員養成のあり方を探ることを研究課題として、01年から継続してきた基盤B(2)(研究代表者)の最終年度に当たる10年度には、それまでの研究成果を総括する研究に展開し、成果報告書を作成した。具体的には、第一に、日本語母語話者と非母語話者が参加し、互いが共生するための言語的手段の獲得を目標とするビジネス共生日本語教育の特徴を提示したこと、第二に、共生日本語教育実習を受講した実習生の学びを質的・量的に明らかにしたこと、第三に、内省モデルに基づく実習プログラムの特徴を提示したことが挙げられる。(2)言語少数派年少者の教科学習支援のあり方を探る研究として、横浜市鶴見中学の協力を得て、母語を活用し、母語の育成と統合した教科学習支援を二人の生徒を対象として行い、その特徴を観察した。結果、教育課程の中で母語を活用した授業の可能性が示唆され、次年度の取り組みに向けた基盤がつくられた。

(1) establishing methodologies for Japanese language education and teacher-development which aimed at facilitating to develop multilingual/multicultural society; (2) developing a system which was designed to support school subjects learning of linguistic

■ 教育内容 / Educational Pursuits

(1) 日本語教育コースで開講している「日本語教育実習」では、共生日本語教育を研究テーマとする後期課程所属の院生や修士も参加して研究チームを作り、研究を進める態勢を作った。実習生間の話し合い、実習生の内省レポート、教壇実習における実習生の教授行動、参加者の談話などを収集し分析し、研究会で口頭発表を行い、論文にまとめる作業を行った。この態勢により、自分たちの実践を対象とすることで、実践と研究の相互交流を体験できること、グループによる研究とすることで、研究手法が先輩から後輩に伝授され、共有されること、修士1年次にも小さい論文を1本仕上げられること、などの点で、日本語教育研究者を養成することを目標とする本コースにとって教育的意義があると考えられる。この研究への参加を通して、修士論文、博士論文へと研究課題を育てていく院生もいる。(2) 鶴見中学における教科学習支援に院生を参加させることで、学校現場を知り、現場に直接影響力を与えることのできる研究のあり方について考える場を与えた。

The educational pursuit should be characterized as the following: (1) education program for Japanese language teacher practicum was put through by being carefully designed to be integrated to a research project funded by JSPS.; (2) establishing a system

■ 研究計画

言語生態学に支えられた「持続可能性日本語教育」の可能性を探ることを目的とする教室づくりを昨年からはじめた。来年度に向けてもそれを継続し、受講生と参加者双方の生態環境の実態を観察し、コースデザインに生かすというサイクルで、アクションリサーチを行いたい。

■ メッセージ

グローバル化に伴う社会の多言語化・多文化化の動きの中で、特にその社会で言語少数派に属する人々の言語権（母語を使う、母語を保持・育成する権利とその社会の共通言語を学び使う権利）は軽視され蹂躪されるという問題が深刻化しています。そこで、国内の言語少数派の人々（例えば就労目的で来日する日系人や日本人との結婚により来日するアジアからの花嫁など）を対象として、この社会の共通言語である日本語教育を支援する第二言語としての日本語教育のあり方が問われることとなります。現状では、日本語の習得だけが強調されることによって、日本への同化要請の道具として機能するという傾向が見られます。彼らの母語・母文化の尊重の実現と統合される形の日本語教育のあり方が追求されなければならぬと考えます。日本語教育コースで開講している「共生日本語教育実習」を中心にして、言語話者としての人々の全人格・生活全般を見渡す日本語教育のあり方学生のみならずと一緒に追求していきたいと考えています。